

人間はもつともらしく、しかつめらしく云つていても所詮ひと皮剥げば、女房十八、使つて減らない百両ではないのか、その上死んで命のあるようにと、つけ足すと一糸まとわぬおのれの姿にしか過ぎない。

いや俗語の根源を云うならば、ままならぬわが身の欲求不満が之に凝結したと見るのが真実性に近いように思われる。元禄時代の庶民に無情感なしとは云えない。この無情感があるからこそ「いつも三月花の頃……」死んでも命のあるように」と永生を求めている。どうもこの俗語は思うに現代人にも通用するほど、そのものズバリだ。「元禄」の二字をとり去れば昭和五十一年の俗語、と銘うっても何ら不思議を覚えぬ。この事は人間を取りまく社会環境は如何に変わつても私自体の貪、瞋、痴の根本煩惱は、いささかもかわらぬからである。かりに変わるとしたら時代ものの歴史小説ブームは成り立たない。私の愛情運が不変であればこそ、戦国の武将の姿を現代に浮き彫りすることも出来る。と云つても元禄時代と今日とは、社会生活も人間関係も複雑に入り込み、昔日とは比較にならぬ。教育制度もいざわたり、学校の数か

らいうと、世界一の教育国家である。それだけ知的水準は高く、黒を白と云いくるめることは朝飯前だ。こんどのロッキード事件の主役たちの国会の証言を聞いていてもその感傷を深くする。云いかえると、貪、瞋、痴の三毒に、理論武装して「自分をよし」とする。こうなると、元禄時代より遙かに人間自体は悪くなっている。道義心は進化どころか、却つて退化した。現実一辺倒で、あいにく無情感などは持ち合わせがない。朝から晩まで鯛焼の唄ではないが、現実には追いかけて、静かに自分をかえり見る余裕がない。交通機関のスピード・アップは、益々忙しさに拍車をかけ、その反面、いくら不景気でも、高度経済成長時代の夢が捨て切れない。まだ今にレジャー、レジャーにうつつてぬかしている。週刊雑誌はエロチシズムの花盛り、「本誌独占」のタイトルで、芸能人の結婚、離婚、性的スキヤンダルを暴いている。又どのチャンネルをひねつても、歌と踊りをやっていないテレビはない。一日何時間放映しているの

らいうと、世界一の教育国家である。それだけ知的水準は高く、黒を白と云いくるめることは朝飯前だ。こんどのロッキード事件の主役たちの国会の証言を聞いていてもその感傷を深くする。云いかえると、貪、瞋、痴の三毒に、理論武装して「自分をよし」とする。こうなると、元禄時代より遙かに人間自体は悪くなっている。道義心は進化どころか、却つて退化した。現実一辺倒で、あいにく無情感などは持ち合わせがない。朝から晩まで鯛焼の唄ではないが、現実には追いかけて、静かに自分をかえり見る余裕がない。交通機関のスピード・アップは、益々忙しさに拍車をかけ、その反面、いくら不景気でも、高度経済成長時代の夢が捨て切れない。まだ今にレジャー、レジャーにうつつてぬかしている。週刊雑誌はエロチシズムの花盛り、「本誌独占」のタイトルで、芸能人の結婚、離婚、性的スキヤンダルを暴いている。又どのチャンネルをひねつても、歌と踊りをやっていないテレビはない。一日何時間放映しているの

らいうと、世界一の教育国家である。それだけ知的水準は高く、黒を白と云いくるめることは朝飯前だ。こんどのロッキード事件の主役たちの国会の証言を聞いていてもその感傷を深くする。云いかえると、貪、瞋、痴の三毒に、理論武装して「自分をよし」とする。こうなると、元禄時代より遙かに人間自体は悪くなっている。道義心は進化どころか、却つて退化した。現実一辺倒で、あいにく無情感などは持ち合わせがない。朝から晩まで鯛焼の唄ではないが、現実には追いかけて、静かに自分をかえり見る余裕がない。交通機関のスピード・アップは、益々忙しさに拍車をかけ、その反面、いくら不景気でも、高度経済成長時代の夢が捨て切れない。まだ今にレジャー、レジャーにうつつてぬかしている。週刊雑誌はエロチシズムの花盛り、「本誌独占」のタイトルで、芸能人の結婚、離婚、性的スキヤンダルを暴いている。又どのチャンネルをひねつても、歌と踊りをやっていないテレビはない。一日何時間放映しているの

らいうと、世界一の教育国家である。それだけ知的水準は高く、黒を白と云いくるめることは朝飯前だ。こんどのロッキード事件の主役たちの国会の証言を聞いていてもその感傷を深くする。云いかえると、貪、瞋、痴の三毒に、理論武装して「自分をよし」とする。こうなると、元禄時代より遙かに人間自体は悪くなっている。道義心は進化どころか、却つて退化した。現実一辺倒で、あいにく無情感などは持ち合わせがない。朝から晩まで鯛焼の唄ではないが、現実には追いかけて、静かに自分をかえり見る余裕がない。交通機関のスピード・アップは、益々忙しさに拍車をかけ、その反面、いくら不景気でも、高度経済成長時代の夢が捨て切れない。まだ今にレジャー、レジャーにうつつてぬかしている。週刊雑誌はエロチシズムの花盛り、「本誌独占」のタイトルで、芸能人の結婚、離婚、性的スキヤンダルを暴いている。又どのチャンネルをひねつても、歌と踊りをやっていないテレビはない。一日何時間放映しているの

## 黒髪有情

### 竹下富士松

昭和七年秋なかば  
上海事変の動員に  
生命くれよの赤紙うけて  
わが人生もこれまでか  
最後はきれいにさっぱりと  
ひと花咲かそう潔よく  
心きめれば身も軽く

徳ぶ心に情けあり  
庭の白梅チラホラと  
昔のままの花の香や  
枯れても春を忘るなよ

あ、さりながらさりながら  
故知らねどもこの我は  
取残されて補充隊  
乗馬委員を命ぜらる

軍馬の徴発調教と  
朝夕馬と過すうち  
わがツラ迄も長くなら  
馬糞の匂い身にしみる  
ひと花どころか砲声も  
聞けぬ日夜のやるせなさ  
思いあまりて隊長へ  
野戦部隊に加えよと  
願ひでる度隊長が  
ニコリ笑つていうことには

馬は兵器を生きた武器  
弾丸くぐつて闘うも  
馬のツラみてはげむのも  
同じ軍務じゃ国の為  
命を粗末にするじゃない  
せくなあわてな死ぬ事は  
しかもお前にやできすぎた  
女房が国にいる筈じゃ  
オレのせめての思いやり  
悪くするなど訓されて

有難いやら口惜しやら  
腰の長船夜泣きする  
あしたに兵馬見送りつ  
夕に英霊迎えつつ  
或は愛馬に鞭うちて

桂浜辺や秦泉寺  
西に東に駈けめぐり  
うつぶん晴らす日が続く  
馬匹日誌を書き綴る  
兵舎に月の影淡し

男涙のいが笑い  
思わず我は膝たたき  
さきすぎたる黒髪の  
そのお守りのごりやくが  
その黒髪のお守りが  
オレを銃後に戻したぞ

徳ぶ心に情けあり  
庭の白梅チラホラと  
昔のままの花の香や  
枯れても春を忘るなよ

長生きせよと妻をみて  
ひそかに祈る我もまた  
あ、老いにけり老いにけり

日を見つめるのは滋味滾々として  
つきぬものがある、たぐい稀なる  
長寿の道にぽっかりと大きな灯り  
を見付けた様な、再会こそは人生  
の珠玉篇とも云いつべき一こまで  
あろう。

## △たつみ 春秋抄 第八話

### 再会の手帳

一もとの 篠懸の木の  
くづおれて 影をひそめり  
幾十歳 葉末の露は  
地を這いて 茲に寄り添い  
大いなる 泉となりき  
吾等 こそ たつみ会と云う  
一口に五十年と云うが、この半  
世紀程波瀾に満ちた歴史はない。  
それは苦悩と屈辱の総括であった。  
そんな中で思い掛けなくも四十年  
振り辰巳会にめぐり会えた事は  
何と云つても大きな幸であった。

黄旗亭  
て、人々が秘かに抱きつづけて来た郷愁が大きく盛り上つて来たのだから誰もが、はやる心で糾合したのも当然の事であった。わけても辰巳会は世の常の他人の寄り合ではない。たとえば、淡黄色のたわに房をなした「す、かけ」の花の様に元木に繋がる兄弟仲である。

(N君の場合) 昭和四十七年  
×月×日午後五時に神田一ツ橋の  
東大文学部へ来てくれと云う先  
方の指示に従つて、私は心の高ぶ  
りを抑え乍ら出向いて行つた。こ  
こ迄事を運ぶのに数度の電話と文  
通を交わしての結果であるが、何  
分にも五十年以上消息を絶つた論  
一度も顔を合わせて居ないのだか  
ら不安と期待が入り交つて相当固  
くなつて居たのは致し方がない。  
一寸した浦島太郎である。

解除するとの命令に  
夢かとはかり茫然と  
言葉も知らず立ちつくす  
手柄話もないままに  
召集解除は情けない  
これじゃ威張つて帰れるか  
せめて一度は弾の下  
くぐつた上で帰りたい  
ニコリ笑つて隊長は  
心配するなよくやつた

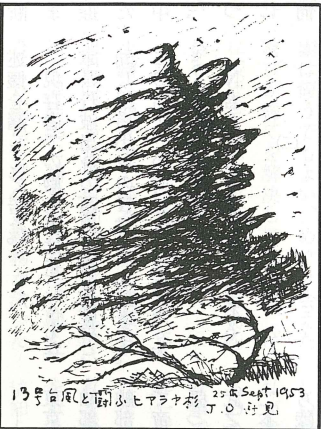
奇しきは人のさだめかな  
あ、あの日から四十年  
有為転変の幾星霜  
覇氣衰えてしみみくと  
召されたる日を偲びつつ  
かたわらみれば茶を入るる  
妻あり静かにほほえめり  
この婆さんの黒髪が  
オレのいのちを守つたが  
今じゃどうやら白いのが

悲運の袂別、敗戦の断層等を含め  
く広がって行くのであった。茲に  
書き並べた、エピソードは  
私だけのほんの一例にしか  
過ぎないが同じ様に、いや  
それ以上に感激的な場面が  
随所に展開されたのを私は  
幾つもこの目で見届けて来  
た。はしなくも多くの盟友  
と過ぎにし夢を語り、若き  
日のロマンにひたりつつ明

N君は鈴木商店を去つてからず  
つと後、大阪橋正管区長を任せ、  
堺の刑務所長をして居ると云う風  
の便りを聞いた事があつたが、そ  
の時は逢えずじまいであつた。そ  
れから又、何年かして不図した事  
から東京で公証人をして居るとの  
事を聞き、或る日、私は大阪平野  
町の公証役場で用事をすませた後、  
公証人の名簿を見せてもらひ、遂  
遂彼の住所をつき止めた。私は且  
つて「たつみ」十三号に同君の思

一段昇つて軍曹と  
勲六等が下賜される  
黒髪切つた女房の  
土産にせよとなだめられ

みえて救しき老いの身の  
言葉なけれど目で語る  
速き昔の黒髪を



1953年9月13日 竹下富士松の自筆

い出を載せた事があるので手紙に添えて、同誌を送り辰巳会の生態を知らせ、「私の名前なんか記憶にないかもしれないが」と書いた処、直ぐに電話が来て「憶えとる憶えとる、君とは一緒に寝起きした間柄だから決して忘れては居ない、東京の済美寮では田代君に一方ならん世話になったのでこの二人の名前だけは何んな事があったも忘れん」とざつとぼらんの声が聞えた。私は電話機の向うに丸まつちいゴムマリの様な少年の日のN君の面影を想い浮かべ乍ら昔しと少しも変らない語調にたまらない懐かしさを感じ直ぐにでも逢い度い様な衝動にかられた、彼とても同じ様に懐しみの余り一刻ももどかしく電話を掛けて来たものに違いない。そして遂に、私の出京を機会に面会するチャンスがめぐつて来た。

会館のフロントへ来意を通じてワク／＼と年々待つて居ると間もなく姿を見せた人は、かすかに昔の面影を宿したまぎれもないN君だ。流石に長年の空白は争えぬ、若し道ですれ違つたらそのまま通り過ぎてしまふかも知れないであろうN君だ。私は無言で椅子から離れた。「やア 何うも 長い事お待ちしてすまん」といきなり

懐しむ話が少からず出た。後にしと思えば、この頃、全国辰巳会は既にSさんの構想の中にその萌芽を宿して居たのであった。この年、Sさんは法学博士の学位を受けられた。それから四、五年後、京都の何有荘で初めての辰巳会全国大会が催された時、私は再びSさんにお逢いする事が出来た、この時はSさんは呉造船の社長をして居られた。広島県出身の氏は瀬戸内をこよなく愛され重大な関心をよせられて力の入れ様も一通りではなかった、文筆家で社交家でテレビでも度々若々しい姿を見せて下さったのに、卒然として他界されたのは一体何う云う事なのか。

Sさん 住田正一氏は沢山の仕事を仕残して世を去られた。辰巳会に取つてもかけがえのない人だったのに。四十三年十月であった。奇しくも、住田さんの死の十日後私の親分横山さんも後を追う様に身まかれた、悲しみの涙がかわかない。

(三)

(H氏との再会) 私等一行を乗せた車は秋の冷気をつんざいて新宿から甲州街道を走り調布市深大寺に向つた。今日はこのお寺の

口を出た言葉は意外や五十年の断絶を少しも感じさせない昔のままの豪放な彼であった。私は手を握り乍ら声をつまらせた、予期した奇遇にも拘らず熱いものが胸の中を通り抜けるのを禁じ得なかった、それからの短い時間、到底語りつくせぬ山々の話題が矢継ぎ早に交わされた。五十年と云う壁を何所か置き忘れた様な隔意のない時間がアツと云う間に過ぎた、私等は、ほの／＼と心の温るのを限りなく嬉しいと思つた。そして、それから数ヶ月、四十八年の天皇誕生日に、N君は、勲二等に叙せられたのを新聞で知つた。私はアツと声を上げて、今更の様に彼の大きさを知らされた、東京支部の例会に初めて出席した彼は其所でも多くの旧知と再会した、そして彼は彼で、村繁氏を連れて来て一緒に新しいメンバーとなり、田代、難波、河合の諸氏等と交々飲を通じて居るのを見て羨ましいと思つた。そして五月、京都白砂山荘での全国大会に出席した彼は、松岡さんや畑さんや、取りわけ大正七年組の午鈴会の方々につかまってもみくちやになつて居た、辰巳会はその席を利用して彼に受勲の祝辞と花束を贈つた、彼はしみじみと「生きて居てよかつた」と

(二)

述懐を漏らして居た。現存者の勲二等は奇しくも兵庫県丹波出身の西川東支部長と、同じ但馬出身のN君と二人である。この席上での御二人の握手は、大きく大きく見えた。N君とは、中尾文策君である。

(Sさんとの選合) 東京虎の門の日産館ビルでの事である。昭和三十一年の夏頃、私は所用の為に某社へ行こうとエレベーターに乗つた時、偶然にも其所でSさんと乗り合せていたのである。私は直ぐSさんだと気付いたが、三十年以上もお目にかかつて居ないのでS氏の方では私如きを憶えて居られる筈がない。Sさんはその頃、東京都の副知事をして居られたので鈴木商店に關係ある者で氏の名声を知らぬ者はなかつた。せまいエレベーターの中でいや応なく向い合つたがS氏もチラと私の方を一瞥つされたので私は前後の考えもなく吐き「Sさんで御座いますね、私は鈴木商店時代保険部の横山さんの所に居りました黄旗で御座います……」と挨拶をした。Sさんは直ぐには思ひ出せそうもない表情で居られたが無言で一すうなづいて見せられた。

げて居たが私とて半白の白髪頭としてみだらけの顔に眼鏡を掛けて居るのだから先様だつてそう簡単に判る筈がない。私は一連のスピーチの切れ目を持って声をかけた、「Hさん御機嫌さんで御座います私……」と云いかけるのを皆迄云わせず、「お、君か 待つて居た待つて居た 実は今日君が来る」と聞いて居たので先刻から探し廻つて居たんだ、何年位違わなかつたらうか随分年を取つたね よく僕が判つたね……」おおせの通りである。名札がなかつたら判らなかつたかもしれない、貴方のおつむも綺麗になりましたね、と云おうと思つたがこれは止めた、二三言話をして居る内に段々昔の気分が甦つて来て、そして又新しい親近感が湧いて来るから旧知と云う物は有難いものである。Hさんは何うして今日迄辰巳会へ顔を出されなかつたのか、今やそんな詮索は何うでもよい、めぐり会えた喜びが総てを解決してくれた、げに辰巳会とは摩訶不思議な魅力を持つ集りである。

Hさん 広岡一男氏は大正八年小樽高商を出て鈴木商店に就職された時、最初の仮勤務時代を私の居た保険部に籍をおかれた。間もなく外国電信部へ本勤務が決つたが私はH氏が保険部を離れられるのと同じ本店の中であり乍ら肉身に去られた様な淋しさをおぼえた。一緒に居たほんの短い期間取り立てて之と云う程の事もなかつたのに妙にうまが合うと云うのが大学出たての二十代の氏に坊んさんの私は長兄の様な親近感を抱いて居た。それから何年かして氏が浪華倉庫下関支店長になられた前後の頃私は保険部公用で下関観音崎町や門司市小森江あたりへ出張した時、一寸した事故にあつて大変厄介をかけた事が後々迄忘れられる事が出て来た、そのいたわりが今も身内の何所かに沁み込んで居る。そして、そのまま暗転の袂別、五十年の悲運を経て今半世紀後の東京でめぐり会えたのである。複雑な感慨がこめられたのも当然である。通が飛び通つた、意志の疎通が深まるにつれその中から又も新しい接点が発生した。囲碁である。私が本部の囲碁部の世話をして居るのを氏の知る処となり暮の好きな事では人後に落ちないH氏は是非一度私と手合せをし度いと盛んにモーションを掛けて来た。内心私を捻じ伏せて兄貴としての權威を示そうと思つて居るのか何うかは知らないが気のおけぬ同志なら

りが無い。

この余波が関西迄押しよせて来て四十九年五月の全国大会の前夜の希望に従い大阪の宿で、本部側から今村冬二郎、橋本知一郎、私と三名、東軍、日さんと田代義雄とが終夜入り乱れて棋戦展開と云う珍事となった。越えて翌五十年五月の大会の時は六甲祥龍寺に一般の遠来のお客様の為に宿泊の用意をした処、この時もすかさず氏の指令によりこの宿に便乗して数面の碁盤を持ち込み、特に名古屋の秋元鷹男氏にも出馬を乞い今村、橋本、私の本部勢、秋元、岡、田代の東軍と混戦を開催した。囲碁を一つのポイントとして今や旧交が炎上する、広岡さんと私も昔以上の兄弟分に復縁した、辰巳会の再会記録は他にも数え切れない。

フレイフレー老棋客達！ 囲碁野郎の再会に栄光あれ、リクレーションと頭の体操とスリルがあつて暮のある処人生は尚々楽しい。

(四)

(M兄貴との出会い) 昭和三十一年十月、辰巳会が結成されて初めての創立総会が神戸の国際ホテルで開催された。その時、配付された一冊の会員名簿は私等の以

過ぎた、四十年に近い長い年月であった。そうして舞台は一転、辰巳会の結成となり急転直下、M兄貴との再会が実現したのである。昭和三十六年初夏の夕べ、村井順三氏と私は神戸から出向いて下さった横山老人を迎えて大阪北の料亭で一席を囲んだ思い出は終生忘れる事が出来ない。私の人生に於いて多くの敬慕する先輩知己の中でもこの二人は最も大事な肉親以上の人である、その三つ巴が三十余年目にめぐり会えたと言えは多くを語る必要はない。よくぞ生き永らえて今日を確め会えた素晴らしい感動の高波が何時果てるとも知れなかった、慾を云えば若し茲に小串牛蔵氏が居たら完全な保険部復元になるのだがそんな贅沢は限りがない。が、その小串は大正十一年普通寺輜重兵第十一大隊に入営、除隊後京城支店勤務に復職し沢村亮一氏、中井義雄氏の

下で働いて居たが本店解体後、釜山カネタツ商店を興し十数年の地盤を築いたが敗戦の衝撃をもちにかぶつて着のみ着のまま内地へ帰還文字通りの裸一貫となり其の後日商宇部出張所に就職して神戸支店に勤務して居たが、敗戦以後の失意と無理がたたつて病に倒れ尼崎市立花駅前の病院で生涯を

後の人生に大きな潤いと新しい展望をもたらす鍵となった、私はこの名簿を手にするやいなや真先に見出しの(M)の部を探し其所に忘れ得ぬ人の名を見付け出して歓喜の声を上げた、三十年來行方を尋ねあぐんだM兄貴の名が歴然と載つて居たのである、私は目を皿の様にして其の住所を食い入る様に読んだ。永年の夢がかなえられそうである、少年の肉身の兄と同様な人を見失つてから半世紀近く追いつけて来た夢である。時をおかず矢の様な書信を飛ばせて相寄る心が燃え上るのに時間はかからなかった。大阪駅のホームで再会するのに私等は若し手違ひがあつてはならぬとお互に最近の写真を交換して大事を取り子供の様に気持ちはずませた。M兄貴は取引先の椿本チエーンへの招待を請けて近日富山市から来阪すると云つて来たので私は迎えに出るため手筈を打ち合わせたのである。この事が決つてから私は直ぐにこの情報を須磨の横山正躬さんに知らせた、横山老は辰巳会発会式の時M兄貴の事を私に聞かれたがその時は返事のし様がなかった。それが今改めてこの報を聞かれて『この機会に三人では非一席を共にし様八十を過ぎたわしに取つて老後の

閉じた。五十才の若さであった。私に取つて村井氏が長兄なれば次兄にも当る小串氏である、尼崎水堂の日商社員寮や立花の病院へ度度見舞いに訪れたが遂にその葬儀を送らねばならなかったとは無念の極みである。そして又、村井さんはその名の通り神鋼電機鳥羽モートルを販売したのが動機で今の鳥羽商店の名を全国に高めたが初期の頃神鋼電機社長中井義雄氏の信頼と知遇を得て力強いバックボーンを樹立した。そして今又私は辰巳会の幹事会で中井さんの教示を受けその下部業務に従事して居る。中井さんは今でも時々「村井君と君と三人で一度同席し度い」と云われる、旧保険部の三名が揃いも揃つて中井さんと深いつながりを持つ、奇縁と云えば奇縁だがこれこそ辰巳会の辰巳会たる面目であろう。

横山さんを中心にして、何有荘の出会い、マヤホテルの宿泊、依水園の大会等私等トリオの親子付き合ひは先年横山老の御世界迄絶える事がなかった、何時かはこようと覚悟はして居ても悲しみはつきる事がない。これからは村井さんと二人で、故横山居士の深い滋愛を噛みしめて長くその法灯を受け継いで行く事であろう。村井順

思い出にゆつくりと昔話がし度い』と御指示になった。間もなくM兄貴からX日X時大阪着の列車で何号目の車輦に乗るとしらせて来た。今や夢は現実となつて刻々と近づいて来る、私は無論の事、童顔をほころばせてその日の来るのを首を長くして待たれる横山老の顔が目に見える様であった。

M兄貴事、村井順三氏は現在富山市でも知る鳥羽商店の社長である。

M兄貴の事は断片乍ら度々本誌の紙面に現れた事があるので重複をさけるが鈴木商店時代相撲部、庭球部の選手として縦横に活躍した万能スポーツマンで、その半面「ものあわれ」を説く優雅な精神の持ち主であった。が、それよりも私に取つてもっと大事な事は小学校を出たばかりの見習員の私に勉強の指針となつて書道、英文法の指導に力を入れ、日常生活の中でも私はしばしば須磨寺、青谷の兄貴の下宿へ押しかけては寝食に甘え何時しか知らず知らずの内に彼の人格に同化されて行つた、後年の私の人生に大きな影響力を持った事を思えば、私としては永世兄とも師とも仰ぐべき人であつたのに時流の仕業とは云え三十年の空白は心ない運命のいたづらで

あつた。大正七、八年頃、本店保険部には横山さん、M兄貴の他にも一人小串牛蔵と云う私より三つ年上の若者が居て総勢は主任以下四人だけの本店では一番小人数の部であつた。それだけに他の部にはない親近感が強く三人共横山さんの子飼ひ同様に育成され働いて来た、鈴木商店の家族主義を凝縮した様な横山一家とも云える独特の雰囲気形成して居た。その内、小串は兵役の為保険部から抜けたが私は転勤も移動も関係なく此処からはついぞ出してもらえそうもないままに釘付けになつてしまつた。M兄貴も横山親分の信任が厚ければ厚い程いかな手放してもらえそうもなく、保険業務と云う補助商業の非戦闘的な仕事にあきたらず青雲の志の満たされぬまま遂に風雲児竹田儀一氏と行を共にして離店する結果となつてしまつた。親分や私の纏る手を振り切つて自ら苦闘の荒波へ飛び込んで行つたその勇氣には事の良否は兎も角私等は涙を呑んで手をつかぬるより他仕方なかった。後から聞けば随分辛酸と苦勞を味わわれたらしいがそれもこれも今日の大を成す糧となつて結実したとなれば貴重男子一代の記録と云わざるを得

三氏との出会いこそ私の再会記録の白眉である。

# 75 沖繩海洋博を訪ねて

ま え が き

昨年九月神戸製鋼所の 社友会 (退社時管理職以上のOBの会) の席上、同社西川総務担当常務から沖繩海洋博に出展したK・R・T (米国ボーイング社の技術と神鋼が独自開発したコンピュータコントロールによる画期的な都市無交通システム) 視察者の便宜を計る為、現地のホテル、日本航空の往復座席を期間中一定数確保してあるが、多少のユトリがあるの

で社友会各位に提供するから海洋博を見学かたがた沖繩の歴史についても視野を拡め、数多い史跡文化財等も見学され、更に沖繩の持つ特異性にも心を致し此の機会に見識を拓いて頂きたいとお話があつたので早速申込をした。次の辰巳会本部の幹事会でこのことを披露した処、希望すれば社友会員並みにして貰えるかとの質問が出たのでその席から電話で照会したら、折返し歓迎する旨の返事を

頂いたので大幡久一氏、今村冬二郎氏、畑 薫氏、それに私の四人で行くことに決めた。神鋼総務部川原庶務課長、藤田係長のお話によれば沖繩の旅としては一月の中頃が暑からず寒むからず年間の中で一番好適の由、若い方ならば二泊三日でも廻れますが、御年(四人の年を合計すると平均八十才となる)から考えて駆け足旅行でなく一日伸ばして三泊四日にされたら僅か一日の差で随分緩り出来ますよとのアドバイス、私達の為の特別なスケジュールまで拵らえて下さつた。出発前に服装、現地の乗物、夜の食事、お土産等についてお話をすると御両氏をお訪ねし、細々とした点までお話を承り予め用意して頂いた往復航空券、ホテル宿泊券、海洋博入場券等を受取り、一月十二日伊丹を出発、幸い四日間共、好天

に取られて現役二年をつとめ大正十五年十二月に満期除隊したがその時は不景気のどん底で、鈴木商店も明日をも知れぬ真暗な年の瀬と云う瀬戸際であつた。折しも二月二十五日、天皇崩御の悲報が伝わり年末から正月にかけて国内は丸つぶれの暗澹たる雲に閉ざされた。新年は「諒闇」御停止」と喪が発せられた上に経済パニックの年となり運命の昭和二年は鈴木商店を激動の渦に巻き込んで重大な歴史の塗り替えが迫つて来た、こうした混乱の内に遂に四人共散り散りばらばらになり時の流れに身をまかせせるの余儀ない歳月が経つて行つた。私が海岸通り十番地を訪れた時、且つての本店は「海岸ビル」と云う名に改められ蓬萊不動産の管理する処となり其処には横山さんの「三生商会」梶山さん魚田君の「勃海商船」や「パンブロンズ商会」「太陽産業」等本店の残党が僅に孤塁を守つて居た。M兄貴とも消息を絶つたまま身辺の急迫に忙殺されて忘れられるともなく忘れて居たが何かの折、金沢市御小人町で商売をして居られるとの風聞を小耳にはさんだが、其所も引き払つた後の事でつかみ処がなく戦争の大波に漂う長い歳月が

と消化、緩つたりとした旅を存分に愉んで十五日夜八時十五分無事元氣一杯で伊丹に到着した。以下はその概要である。

一月十二日(月)

## 嗟峨崎 亨

エキスポ75沖繩海洋博を見て来た。琉球の郷土料理を喰べて来た。近い将来の都市交通の華、無人電車「K・R・T」に試乗した。中部や南部の戦蹟巡りをして来た丈というのでは意味なしとまでは云はないが洵に勿体ない。折角大切な時間とお金を使って出掛けたからには本土から遠く離れた南西洋上の特殊の風土が生み且育て上げた嘗ての琉球王朝文化の趾をホンの一部でもよいか肌と感じ取る様な旅をしてきて下さいとK・R・Tに出展準備で何度も往復、現地事情に明るい神戸製鋼の川原、藤田両氏のアドバイス。私自身も臆ろげ乍らその様に考えていた際なので僅か三泊四日の慌しいスケジュールながら出来るだけ沖繩を喰り込みたいと関係者の話に耳を傾け、一夜漬けの俄か勉強ではあつたが二、三冊の参考書も読んで一月十二日午前十一時半粉雪の舞う伊丹空港を翺び立った。高松上空、左手の吉野川は阿波池田市から左折大歩危、小歩危の